

人文・社会科学における科学コミュニケーションの実践
——京都アカデメイアを事例として——

The Practice of Science Communication in Cultural and Social Sciences
: Focusing on the Activity of Kyoto Academeia

大窪善人 (佛教大学大学院社会学研究科)

Okubo Yoshio

(Bukkyo University Graduate School of Sociology)

百木漠 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

Momoki Baku

(Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies)

中森弘樹 (京都大学大学院人間・環境学研究科)

Nakamori Hiroki

(Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies)

浅野直樹 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学)

Asano Naoki

(Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies, Doctor's
Course Completion without a Ph.D)

積田俊雄 (京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了)

Tsumita Toshio

(Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies, Master's
Course Completion)

掲載 : 2013 年 8 月

NPO 法人 京都アカデメイア・ウェブページ

1. はじめに

2000年代以降、日本においても科学コミュニケーションに対する社会的な注目がいっそう高まりつつある。その傾向は、政府の市民との科学コミュニケーションの推進（内閣府2001, 2006）や北海道大学、東京大学、早稲田大学において先鞭をつけられた科学コミュニケーター養成プログラムの実践にみることができる。そして、これらの動向は大学機関に限ったものではなく、科学館、地方自治体、企業、NPOなどの多様なユニットが関わることで、社会全体にも浸透してきた（小林 2010）。その中でも、小寺他（2009）や飯島他（2010）によって報告されている実践は、学生が団体の中心であるという観点から意欲的な取り組みであると言えるだろう。

科学コミュニケーションやその取り組みは、概ね自然科学が社会との関わりをどのようにもつのかということ念頭に置いた取り組みを指すことが一般的である。他方で、人文・社会科学サイドからみれば、そうした科学コミュニケーションやアウトリーチ活動といった言葉自体がいまだ馴染みのあるものになっているとは言い難いような状況であるように思われる。しかし、それは科学コミュニケーションと人文・社会科学とがまったく無関係であるとか、人文・社会科学の科学コミュニケーションが必要ではないということの意味しているのではない。たとえば、医療技術の発達やそれによるリスクが法的制度の整備とも結びついているということ。あるいは、原子力発電が自然科学的・技術的な問題とともに、社会的・経済的な問題とも結びついているということ。こうした観点に立ってみれば、人文・社会科学の知識や能力を社会に対して提供するというのも、きわめて重要な要素であると言えるだろう。

本稿では、以上のような科学コミュニケーションの浸透と人文・社会科学の科学を取り巻く状況と並行しつつ、2010年頃から京都の学生、社会人を中心として活動を行ってきた、京都アカデメイアの取り組みについて報告する。そして、同団体が実践を行う中でどのような課題が見出されたのか、また、その課題がどのように解消、解決されることで発展してきたのかということを示すことで、人文・社会科学における科学コミュニケーションの可能性とその課題について明らかにする。

2. 京都アカデメイアの概要

2.1 京都アカデメイアの設立目的

京都アカデメイアは「専門や所属にかかわらずみんなで勉強する場をつくる」ことを目指して設立された有志グループである²⁾。現在（2013年7月時点）は、大学生を中心として社会人を含めた約10-20名のメンバーで構成され、月1回ペースで模擬授業、アカデメイア・カフェ、勉強会、インターネット放送などの各種イベントを行なっている³⁾。以下に、京都アカデメイアが設立された目的を三点に分けて説明することで、京都アカデメイアの団体概要紹介に代えることにしよう。

第一の設立目的は、専門分野にとらわれない学際的・領域横断的な「学び」の場をつくることである。近年、学問の専門分化・細分化の弊害が問題とされ、専門領域を横断した「総合的な知」や「学際的な研究」を求める声が高まっている。しかし今日の大学（を中心とするアカデミズム）では、専門分野をこえた「学び」や「研究」を実践する場や機会が十分に提供されているとは言い難いのが現状である。多くの学生・研究者は、自身が専門とする分野の勉強・研究に集中しており、異分野の学生や研究者と交流したり共に学び

合ったりする機会は相当に限られていると言わねばならない。そこで大学生や大学院生が主体となり、自ら積極的にそのような場や機会を創りだしていかうとして設立されたのが京都アカデミアである。

第二の設立目的は、学問における大学と市民の距離を縮め、学生・研究者と市民・一般人が共に学びあう場をつくることである。学問の専門分化や細分化が進む現状に対し、近年では、研究者・専門家がその研究内容を市民・一般人に分かりやすく伝えることの必要性が盛んに論じられるようになった。前章でも触れたように、自然科学の分野では研究者のアウトリーチ活動やサイエンス・カフェの試みなどが盛んに行われてきたが、人文・社会科学の分野ではそのような活動が行われる機会はこれまで比較的になかった。そこで大学生や大学院生が中心となって、学生と市民が自由に参加できる勉強会やイベントを開催し、そのような機会を創りだしていくことが京都アカデミア設立の第二の目的である。

第三の設立目的は、学生・市民に限らず、これから勉強を始めようとしている人に対して、その「学び」の入口となるような場や機会を提供することである。学生や一般人の中には、勉強を始めようとしてもどこから手をつけて良いかがわからない、どのように勉強をしていけば良いのかがわからない、といった悩みを抱える人が少なくないはずである。また勉強を進める中で、基本的な用語の意味や教科書の内容などがわからないという人も多だろう。そこで、専門の研究者よりも一般の学生や市民の立場に近い存在である大学生や大学院生を中心に構成される京都アカデミアでは、そのような疑問に答えたり、各分野の基本的な解説をしたりすることで、より多くの人にとっての「学び」の入口を提供してきた。

つまり、京都アカデミアの活動が目的としているのは、①専門分野をこえた領域横断的な「学び」の場をつくること、②学生と市民がともに学びあうための場をつくること、③「学び」のための幅広い入口を提供すること、の三点である。この三点の目的に即して、京都アカデミアは様々な学びの場を提供するイベントを実施してきた。

2.2 参加者・メンバーの変遷

京都アカデミアの母体となったのは京都大学の人間・環境学研究科（以下、人環と表記）および総合人間学部（以下、総人と表記）の学生である。人環および総人は、理念として分野横断的・学際的な研究を掲げており、大学外の活動でもそういった理念を実現しようとする学生が自発的に集まって京都アカデミアが立ち上げられた。

当初は、京都大学の教室などを借りて模擬授業などのイベントが行われることが多く、イベントの参加者も京都大学の学生や教員がほとんどであった。しかし、活動1年目の11月に行われた京都大学の学園祭・November Festival（以下、NFと表記）企画が一般市民向けに行われたのを契機として、次第に京都大学という枠にとらわれず、より開かれたかたちでアカデミア・カフェやインターネット放送などの活動が行われるようになった。活動場所も京都大学の教室に限らず、一般のカフェや図書館、メンバー有志が借りているシェアハウスなど、多様な場所に広がっていくようになり、それに伴って、イベントの参加者も京都大学以外の学生や一般市民にまで広がっていくようになった。最近では、京都アカデミアと同様の活動をしている団体からの参加も多い。活動3年目以降に力を入れているインターネット放送では、遠隔地からの視聴者もおり、より幅広い層に向けての活動が行われるようになってきたと言える。

当初からそのような目論見を持っていたわけではないものの、結果としてこれまで3年間の歩みを振り返ってみるならば、京都アカデメイアの活動は学生から市民へと拡大・移行してきたとすることができそうである。同時に、京都アカデメイアの活動メンバーも当初は人環および総人の学生のみであったが、活動範囲が拡大するにつれ、京都大学の他学部の学生、さらには京都の他大学の学生、京都で働く社会人、京都に在住する一般人へと広がってきた。現在は、大学生・一般市民を含め、10-20名程度のメンバーが活動・運営に参加している。

2.3 京都アカデメイアが重視する理念

前節でも述べたように、短期的な実用性にとらわれない「教養」の重要性や、社会に出ても学び続ける「生涯学習」の必要性が唱えられるようになって久しいが、実際にはそのような「学び」を実践できる場は現在の日本にはさほど多くないのが現状である。また、東日本大震災や福島原発事故を契機として、改めて専門分野にとらわれない領域横断的な知や、専門家が一般市民にもわかりやすくその研究内容を伝える努力が求められるようになってきているが、それらの実現に向けてはまだまだ多くの課題が残されていると言わねばならない⁴⁾。今後の日本では社会の成熟化とともに、よりいっそう「学問」や「知識」の重要性が高まると考えられるが、この社会でこれまで以上に活発な「学び」を実現していくためには、学生／市民の枠を取り払い、専門や所属の垣根をこえて共に自由に学びあうための「場」をつくることが不可欠であるというのが、京都アカデメイアの認識である。

ちなみに団体名称の由来となっている「アカデメイア」とは、古代ギリシアのアテナイに哲学者プラトンが創設し、古代最高の名声を誇ったとされる学校である。アカデメイアでは哲学だけではなく、算術、幾何学、天文学など幅広い学問が学ばれ、そのあり方が以後のヨーロッパ的学問の伝統的性格を規定し、いわゆるリベラル・アーツの原型をつくったとされている。京都アカデメイアでも、かつて古代ギリシアのアカデメイアで行われていたような活発な学問交流を、古き良き教養の伝統が残る古都京都で再現していきたいという思いから、この名称がつけられた。

3. 京都アカデメイアの活動内容とその変遷

前章で見てきたように、京都アカデメイアは人文・社会科学を中心とした分野横断的な「学び」の場を作り、そこで専門家／一般市民の垣根を超えた科学コミュニケーションを実践してきた。ただし、上記のような試みが有志の団体によってなされた前例は現在のところ少なく、それゆえ京都アカデメイアの活動はさまざまな試行錯誤の繰り返しであった。実際に、当初から現在にいたるまでの京都アカデメイアの活動を振り返ってみると、基本的には前章で述べた団体の理念に基づきつつも、その活動内容は大きく変化してきている。そして、このような試行錯誤の過程は、まさに本報告が明らかにしようとしている人文・社会科学における科学コミュニケーションの可能性を追求してきた結果に他ならない。

そこで、本章では京都アカデメイアのこれまでの活動内容から、主に「模擬授業」「NF企画」「アカデメイア・カフェ」の三種類の企画について詳細に報告する。上記の3種類の企画は、京都アカデメイアの変遷を前期・中期・後期に区分した場合に、それぞれの時期においてメンバーが最も精力的に取り組んでいた活動である。

3.1 模擬授業

京都アカデミアは2010年の春より本格的な活動を開始したが、同団体が最初に取り組んだのは「模擬授業」であった。模擬授業とは、有志の大学院生が講師役となり、他分野の学生向けに自身の専門分野について授業を行うという主旨のイベントである。では、なぜ京都アカデミアが模擬授業を実施するに至ったのか。そこに至る背景は、前章で述べた京都アカデミアの設立理念とも関わるところなので、まずはこの点について簡単に触れておきたい。

前章でも述べたように、京都アカデミアは京都大学の人環および総人に所属する有志の学生によって発足した団体である。同研究科と同学部には、人文科学・社会科学・自然科学の多数の研究室が存在し、それらの諸学問領域を統合する「新たな知」の創出が目指されている⁵⁾。しかし、それらの理念を教員や大学組織側の取り組みだけで実践するのは困難であり、実際に人環内では他分野の学生同士が顔見知りですらないというケースも多くあった。単一の研究科や学部内に多くの分野の学生が集まっているにもかかわらず、それぞれの分野の学生の学術的な交流が進んでいないのは、まさに「宝の持ち腐れ」であるといえるだろう。このような状況の中で、自身の専門分野について他分野の学生に分かりやすく紹介しつつ、さらに自らも他分野の内容について理解を深めたいという声の一部の学生間で上がるようになった。以上の発想が契機となり、実際に有志の学生たちの手で京都アカデミアが組織され、模擬授業のイベントが定期的に行われるに至った。

では、実際に模擬授業がどのように開催されたのかについて見ておこう。模擬授業は2010年4月から2011年9月まで、1か月毎から数か月毎に開催された。授業の担当は持ち回りで主に人環の大学院生が務めたが、回によっては人環のOBが務めることもあった。授業内容は、担当者が専門とする分野かもしくは専門に近い分野から、できるだけその分野を入門する学生にとって分かりやすいテーマを選んでもらった。なお、各回の開催日時とタイトルおよび担当者については下の表1の通りである。京都アカデミアの発足メンバーが人文・社会科学の院生が中心であったことから、当初は文系のテーマで授業が実施されたが、後半になると自然科学のテーマでも授業が実施されるなど、その授業内容は多岐に渡っていたといえるだろう。

表1 模擬授業の各回の日付とタイトル

	日付	タイトル	担当者
第1回	2010年4月20日	〈帝国〉〈マルチチュード〉とは何か？	百木漠
第2回	2010年5月25日	精神分析入門／応用	浅野直樹
第3回	2010年6月29日	他者を理解することから社会学へ	中森弘樹
第4回	2010年7月27日	京都学派とは何だったのか	中島啓勝
第5回	2010年9月28日	Young図形で母函数入門	溝口佑爾
第6回	2010年12月14日	桁見積もり(フェルミ推定)実習	奥住聡
第7回	2011年2月4日	ロマン主義から決断主義へ	小林哲也
第8回	2011年3月5日	調査研究の夕べ	浅野直樹
		経済学の夕べ	百木漠
第9回	2011年6月7日	蛍光イメージングの基礎と実用例	栗下泰考
第10回	2011年7月12日	「ピラガパズル学」基礎ゼミナール	東田大志
第11回	2011年9月27日	「文化人類学入門:太平洋の小国家から見える世界」	比嘉夏子

授業の形式についても触れておこう。模擬授業は、「授業」という名前の通り、基本的に担当者による講義形式で行われた。ただし、模擬授業は他分野の学生同士がテーマについて語り合える貴重な機会でもあったため、授業の後半には授業担当者と参加者による質疑応答の時間を多く設けた。授業は質疑応答なども合わせて基本的に 2 時間程度の設定で行われたが、特に授業が盛り上がった回の場合は、質疑応答がなかなか終わらずに大幅に時間を超過してしまうこともあった。上記の形式で行われた授業は概ね好評であり、参加者を対象としたアンケートでも「分かりやすかった」「面白かった」「勉強になった」などの感想が主であった。この結果は、担当者が参加者の学生に近い立場から、彼／彼女らの興味に沿った形で授業を行うという模擬授業のメリットが反映されたものであったといえるだろう。そのような模擬授業の評判や、その都度のスタッフの宣伝活動が功を奏し、多いときには 20 名から 30 名の参加者を集めることができた。

以上より、模擬授業の当初の主旨、つまり「自身の専門分野について他分野の学生に分かりやすく紹介しつつ、さらに自らも他分野の内容について理解を深める」という目的は概ね達成されていたといえよう。ただし、模擬授業も回を重ねることで担当者が一巡し、終盤になると参加者の人数も減少傾向にあった。また、次節で述べる NF 企画を実施したことで、京都アカデミアのスタッフの間でより広い層に向けた知の伝達を行いたいという声が上がることになった。実際にこの時期になると、京都アカデミアには人環や総人の学生以外にも、他大学の学生や社会人などが参加するようになっていた。このような状況を踏まえ、模擬授業は「アカデミア・カフェ」を始めとしたより一般市民向けに開かれたイベントへと発展的に解消されることになった。これらのイベントについては、本章の第三節で紹介することにした。

3.2 NF 企画

次に、NF における活動について紹介する。京都アカデミアは、2010 年度と 2011 年度の二度にわたり、NF で講演企画を開催している。この二度の NF 企画は、団体の方向性を定める上でも、また外部に対する認知度の面でも、京都アカデミアのその後の活動に大きな影響を与えている。まずは、NF での企画の実施に至るまでの背景について述べておこう。

2 章で見たように、京都アカデミアの目的は分野横断的な「学び」の場を作ることであった。模擬授業で様々な分野のテーマを扱うことで、学問の分野に対しては横断的な活動が実現できていたが、その一方で学問の「担い手」の垣根も超えること、すなわち研究者／学生／一般市民を問わず科学コミュニケーションに参加できるようにすることも発足当時から目的であった。ただし、模擬授業においては、大学の教室で授業を行うという性格上、どうしても対象が学部生・大学院生に限られがちであり、一般に開かれたものとはなりにくかった。このような模擬授業の限界を踏まえ、さらに広く社会に開かれた形で知を発信し、一般の人々と相互にやり取りすることを目的として、一般の人々も多数来場する NF での企画を行うことにした。以下では、NF での京都アカデミアの試みをまとめていくことにしたい。

先に述べたように、京都アカデミアでは二度にわたり NF 企画を行っているが、第 1 回は 2010 年の 11 月 21 日に開催した。第 1 回は、社会学者の鈴木謙介氏をゲストに招き、「いま、大学で〈学問〉する意味——新しい〈知〉の場所を創るために」と題して公開討

論を行った。パネリストとして鈴木氏のほか、大学講師、大学院生、学部生、社会人などを揃えた。大学人の中でも博士課程を終えた大学講師から就職活動を終えた学部生まで幅を持たせつつ、個人単位でユニークな活動を行っている社会人も加えて、なるべく大学における学問の意味を多角的に議論できるようにした。観客の来場者数は約 80 名であった。当日の討論では、実学と教養、研究と学問の定義に始まり、就職活動の激化とそれに伴った大学内での実学志向の高まりが確認され、いわゆる「知」や「学問」と呼ばれるものの概念の揺れが問題として議論された。他方で、当時はマイケル・サンデルの講義本が流行となったように、教養志向の復活ととらえられるような現象が大学の外部で起こっており、純粋に学問を学びたい人が潜在しているながら、大学など高等教育機関がそういったニーズにどれだけ対応できているかという問題が批判的に検証された。さらに、大学の外で哲学カフェや読書会などの広がり、生涯学習の可能性が広がっていることを踏まえ、ウェブ上での新たな知とその担い手のあり方が議論された。京都アカデミアではウェブ上での配信活動や情報配信などにも力を入れてきたが、そのような活動の意義も当会で改めて認識する事ができたように思われる。

しかしながら、第 1 回ではテーマの性質上、大学という場所で、大学という機関について、大学で行われる学問というものについて論じてしまったがために、たとえば一般主婦層など大学に関わる事がほとんどない人にとっては、現実から遊離した討論となってしまった部分もあった。それは、京都アカデミアの構成員がほぼ大学内の人間であることやそもそも学問に現実から一定の距離を置く側面があることを考えればある程度は仕方ないとしても、知をより広く発信し、その担い手をさらに拡大していくためには、さらなる工夫が必要であるように思われた。

そこで、2011 年 11 月 26 日に行われた 2 回目の NF 企画では、より大学色を少なくするために、広く一般的な問題を大学的な知とは違う形で切り込んでいく方法を実践している人物を講師として招き、講演会を開くこととした。同時に第 1 回目よりもさらに来場者の反応を取り入れて、なるべく相互コミュニケーションがとれるように環境を整えることを心がけた。講演は小説家の真山仁氏にお願いし、「だから私は小説家になった——真山仁が語る、震災後の日本」というタイトルで開催した。真山氏は、小説という表現手法を活かしつつ、元記者としての社会への批判的な視線をもとに、社会問題に鋭く切り込む講演が行われた。これは大学的な知とは違うスタイルを取った問題提起であり、知の方法や担い手が様々な主体であり得るということが確認できた会となった。来場者数は第一回を上回る 120 名を記録し、盛況のうちに幕を閉じた。

このように、より広い「知」の発信を目指して行われた 2 回の NF 企画であるが、その目的はある程度は達成されたように見える。さらに、NF の企画を経ることで、京都アカデミアの活動理念にとって重要な点を再確認することができた。最後に、この点について述べておこう。人文科学と社会科学の分野では、専門的な書籍や論文の「読書」を中心とした研究が行われることが常であるが、京都アカデミアでは模擬授業、NF 企画と活動を広げていく過程で、専門外の人々との対話を通じた学問のあり方を追求してきた。特に人文・社会科学の分野においては、専門的な研究書のみならず、一般的な人々の認識の中にも重要な知が存在していることがある。そして、そのような一般的な知のあり方にも目を向け、学問の専門知と一般的な知の相互交流を図ることが有益であることを踏まえると、もはや学問の「場」を大学に限定するべきではないだろう。そして、京都アカデミアは

大学から端を発した団体でありつつも、大学の教員や運営組織からは独立した形式を取っているがゆえに、大学の専門知と一般市民のコミュニケーションの橋渡しをするような「場」を提供できるのではないだろうか。

以上の点を再確認できたという点で、二度にわたる NF の企画は京都アカデミアのその後の活動方針を決める上での重要な契機になったといえる。上記の理念は、次節で述べる様々な企画の中で、より具体的に実践されることになる。

3.3 アカデミア・カフェ

2 回目の NF 企画を終えた後に、京都アカデミアではテーマや書籍を設定して自由に議論を行うというイベントを月に一回程度開催してきた。先に述べたように、NF 企画以降のイベントはより一般市民に開かれた形で実施されている。本節では、これらのイベントを中心に、京都アカデミアの 2012 年以降の活動について報告しておきたい。

2012 年以降に京都アカデミアで開催されたイベントは、テーマを設定して議論を行う「アカデミア・カフェ」、書籍を設定してその内容について自由に話す「批評鍋」、他団体や個人と連携して行う「共同討議イベント」の 3 種類に分けることができる。各回のイベントの内容と開催日時は、表 2 の通りである。3 種類のイベントでは、これまでのようにその場で議論を行うだけではなく、インターネットの「Ustream」を利用して会の生中継を行った。それによって、視聴者とリアルタイムでのコメントのやり取りを行うなど、会に出席していない人でも議論に参加することが可能になった。以下では、それぞれのイベントの詳細について見ていくことにしよう。

表 2 2012 年以降の開催イベント

実施日	企画名	参加者数
2012年1月22日	第1回アカデミア・カフェ「最近の大学ってどーなん!？」	15名程度
2012年2月26日	第2回アカデミア・カフェ「就活の「くだらなさ」を超えて」	15名程度
2012年3月10日	第3回アカデミア・カフェ「今、教育を考える」	10名程度
2012年4月28日	第4回アカデミア・カフェ「ハズムを考える」	20名程度
2012年6月2日	共同討議「ノマドと知のこれから～ブロガー玉置沙由里に聞く」	10名程度
2012年7月7日	共同討議「京大J地下の夜間閉鎖問題を考える」	10名程度
2012年8月16日	京都アカデミア・夏休み特別ustream企画 京アカ夏まつり2012	10名程度
2012年10月12日	共同討議「京都アカデミアxku-librarians勉強会 図書館ディスカッション」	20名程度
2012年11月17日	第5回アカデミア・カフェ「たべるをつくる たべるとくらす ～ダイエットから自給自足まで～」	15名程度
2013年1月5日	第1回 批評鍋『ニートの歩き方』	10名程度
2013年1月18日	共同討議「教養ってなんだろう?～『国際高等教育院』問題から考える」	20名程度
2013年2月2日	第2回 批評鍋『ヒーローを待っていても世界は変わらない』	10名程度
2013年3月16日	第3回 批評鍋『雑誌・PLANETS vol.8』	10名程度
2013年4月20日	第4回 批評鍋『発達障害 ヘンな子と言われつつけて』	10名程度
2013年6月7日	第6回アカデミア・カフェ「経済成長 Yes or No?」	20名程度

まず、アカデミア・カフェでは、大学・就職活動・教育・橋下現象など、一般の学生や社会人が特別の知識がなくとも議論に参加しやすいテーマを選び、模擬授業よりも幅広い層に参加してもらうことを目指した。毎回、各テーマに沿って活発な議論が交わされ、

おおむね参加者からの満足度は良好であったように見受けられた。アカデメイア・カフェでは、京都アカデメイアのメンバーが参加者に一方的に学術的な内容を教えるというスタイルではなく、双方が対等な立場にたって自由に議論しあうというスタイルでイベントが進められた。このような議論の場を設けることは、まさに人文・社会科学の分野での科学コミュニケーションを実践するという京都アカデメイアの存在意義にもかなうものであったと言えよう。

これらの工夫が功を奏し、アカデメイア・カフェでは模擬授業にも増して参加者の積極的な発言を引き出すことができた。沈黙が続くということはほとんどなく、むしろ議論が盛り上がってどのように終わるかということに苦勞するほどであった。模擬授業のように1人の講師が発表するという形式ではなかったが、京都アカデメイアのメンバー数名が事前に下調べを行い、論点の洗い出しをしていたことが当日の盛り上がりにつながったと考えられる。参加者からは「面白かった」「また参加したい」などの感想の他に、「もっと専門的な話を聞きたかった」という声も聞かれた。

批評鍋では、専門的な学術書を取り上げるのではなく、近年話題になった人文・社会科学系の一般書を取り上げることとした。アカデメイア・カフェと同じく、専門的な学術知識がなくとも誰でも参加できるようにした。また、この会では「批評鍋」という名前の通り、実際に鍋を囲み夕食を取りながら議論を行うというユニークな形式を取ることで、参加者に自由に発言できる雰囲気を作ることを目指している。議論では、単に課題本の感想を伝えあうだけにとどまらず、そこから派生して様々な社会問題やサブカルチャーの議論などに発展することもしばしばであった。Ustream 中継の視聴者は平均して5~10名と必ずしも多いわけではないが、時にはコメントの書き込みを通じて、京都アカデメイアのメンバーと視聴者がやり取りを交わすこともあり、遠隔地に住む人々との交流を図ることができた。その結果、毎回の中継を楽しみにしている人や、中には人生相談を持ちかける人なども現れた。

共同討議イベントでは個人や他団体をゲストとして招き、ゲストの得意なテーマを設定することで、京都アカデメイアのメンバーたちにとっても新たな視点を導入することが多かった。各回で扱ったテーマについては表2の通りである。有名なブログ執筆者の玉置沙由里氏との討議では、近年インターネット上で話題となっている「ノマド」という新しい生き方・働き方について、実際にそれを実践している玉置氏から様々な興味深い話を聞くことができた。参加者から多くの質問も投げかけられ、Ustream 上の視聴者のコメントを介しても活発な議論がなされた。図書館員の有志勉強会グループ ku-librarians との討議では、大学図書館の利用状況をめぐっての意見交換や、あるべき大学図書館の姿についての議論がなされた。普段、大学図書館員と大学生・一般人が議論を交わす機会は滅多にないので、お互いの意見を交換することができたのは貴重な機会であった。法学部自治会の運営にあたる学生を招いた討議では、大学自治会の現状や近年の大学管理のあり方について有益な意見や情報を交換することができた。

このように、京都アカデメイアでは自発的に勉強会や自治会を主催したり、独自のユニークな活動に取り組む大学内外の団体や個人とも協働したりしながら、各種のイベントを企画してきた。これらのイベントでは、実際にその場にきた参加者、中継を見ている視聴者、特定の活動をしている団体や個人という力点の違いはあるにせよ、議論を一般市民に向けて広く開いていこうとする方向性は一貫していたといえる。以上の試みもまた、人文・

社会科学分野での科学コミュニケーションのひとつのかたちとして位置づけることができるだろう。

4. まとめと今後の課題

以上、京都アカデミアの活動の変遷について報告してきたが、本章ではこれまでの実践をまとめたいので、今後の課題について述べておくことにしよう。

まず、京都アカデミアの活動の特徴として、団体が自発的な発展を遂げてきたことを挙げることができる。3章で述べたように、「模擬授業」に代表される京都アカデミアの初期の活動は、京都大学の人環および総人の学生による自主的な交流・勉強会を目的に開始したものであった。しかし、京都アカデミアの活動はそれにとどまるのではなく、徐々に活動の範囲を大学の外部へと拡大してきた。「NF企画」を契機として、団体の活動は「アカデミア・カフェ」のような市民にも開かれた企画へと移行してきた。そして、活動の中で、大学の外部にも学問や知的なコミュニケーションに対するニーズが存在することが見出された。それは、科学コミュニケーションという観点からみた場合には、単に専門家や学生が市民に対して一方的に知識を与えるのではなく、むしろ、専門家や学生と市民との対話を通じてお互いに学習できるということが見出されたということである。そのような双方向のコミュニケーションが、科学コミュニケーションでは重要な意義をもつと考えている。

また、その際にはインターネット・メディアの活用が有効であった。京都アカデミアでは活動の当初から積極的にホームページやブログ、動画共有サイトなどのインターネット・メディアを活用してきた。これらのメディアを活用することで時間的、地理的な参加の障壁を下げることができ、普段は学問に縁遠いと感じている層に対してアピールすることもできた。現在の京都アカデミアの主要なイベントでは、インターネット・メディアの利用は必要不可欠なものとなっている。

その一方でいくつかの課題も明らかになってきた。ひとつは、団体の運営に関わる課題である。飯島他(2010)ですでに提起されている問題ではあるが、団体の運営に携わるスタッフをどのように確保し、また活動やイベントの質をどう保証するのかという課題がある。それは、スタッフの多くが大学生、大学院生であるために安定した活動場所や金銭的な支援体制を整えることが難しいという課題とも結びついている。また、京都アカデミアでは、イベントの企画は主にスタッフの発案・検討を経て実施されているが、イベントの進め方や対応の手順などが具体的に整備されているというわけではなかった。参加者の潜在的なニーズを汲み取り、なおかつ、イベントの質をどのように維持していくということが重要な課題である。

以上のような課題を踏まえて、現在、京都アカデミアでは、団体活動を持続的、安定的な実施のために団体組織の強化に取り組んでいる⁶⁾。また、それと連動して、活動の記録を映像だけではなく文字として読める形で公開するために雑誌媒体の製作を準備している。京都アカデミアは、人文・社会科学における科学コミュニケーションの実践を通じて、科学的な知をより広く公共的に活用するための活動を続けている。

付記

本稿は京都アカデメイアの活動に携わった 5 人が分担して執筆した。第 1 章，第 4 章を大窪，第 2 章を百木，第 3 章 1 節を中森，同 2 節を積田，同 3 節を浅野がそれぞれ担当した。

注

- 1)たとえば近年注目されている討論型世論調査は，科学・技術についての自然科学的なコミュニケーションと社会とを結びつける試みのひとつである。
- 2)京都アカデメイアのホームページ <http://www.kyoto-academeia.sakura.ne.jp>
- 3)京都アカデメイアは必ずしも固定的なメンバーで活動をしているわけではなく，知人の紹介などを通じてゆるやかなメンバー構成がなされている。メンバーの入れ替わりも定期的に起こっており，厳密なメンバー数を把握するのは難しい。
- 4)他方で，近年はインターネットの普及とともに，朝活や読書会など，学生・市民が共に自由に学びあう機会をつくろうとする動きが，京都アカデメイア以外にもあちらこちらで生まれてきているようにも感じられる。たとえば，twitter や facebook などのソーシャルメディアを通じて，同じ興味・関心をもつ者どうしが集まり，勉強会や読書会をするなどの動きが全国各地で起こっている。第 1 章でも触れたが，大阪大学を中心に活動する **Scientthrough** (飯島他 2010) や東京大学を中心に活動する **Oto1** (小寺他 2009)，学生と市民がカフェで哲学談義をする哲学カフェなど，京都アカデメイアと同種の活動を行う団体も少しずつ増えてきているようである。
- 5)京都大学総合人間学部 京都大学人間・環境学研究科ホームページ <http://www.h.kyoto-u.ac.jp/>
- 6)2013 年 7 月，「特定非営利活動法人 京都アカデメイア」として認証。

● 文献：

- 飯島玲生，中川威，石田峰洋，鈴木竜太，中津壮人，橋本亮，矢引達教，2010:「学生による横断的科学コミュニケーションの試み：阪大学生有志団体 **Scientthrough** を事例として」『科学技術コミュニケーション』7, 165-176.
- 小林博司 2010:「社会の中の科学知とコミュニケーション」『科学哲学』43(2), 33-45.
- 小寺千絵，池内桃子，岩崎渉，榎戸輝揚，生出秀行，音野瑛俊，佐々木浩，砂田麻里子，手塚真樹，豊田丈典，永村直佳，浜地貴志，平沢達矢，松尾信一郎，宮武広直，横山広美 2009:「大学院生による科学者コミュニケーションの可能性と課題：東大院生有志グループ **Oto1** の実践を通して」『科学技術コミュニケーション』6, 69-81.
- 内閣府 2001:『第二期科学技術基本計画』<http://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/kihon.html> (2013 年 7 月 20 日取得)
- 内閣府 2006:『第三期科学技術基本計画』, http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/Kihon/06032816/001/001.pdf (2013 年 7 月 20 日取得)